

## マタイによる福音書5章17-20節 「パリサイ人よりまさる義」

### 1A 律法と預言者の成就 17-18

#### 1B 律法の目標 17

#### 2B 一点一画変わらない律法 18

### 2A 天の御国の義 19-20

#### 1B 律法の遵守 19

#### 2B パリサイ人と律法学者の義 20

## 本文

マタイによる福音書 5 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、5 章前半 16 節まで来ました。今朝は 17-20 節です。まず本文を読みます。「17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。18 まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。19 ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを行い、また行うように教える者は天の御国で偉大な者と呼ばれます。20 わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」

私たちは、5 章からイエス様の山上の垂訓を読み始めています。前回は、八つの「幸いです」という宣言を見ました。キリストが支配される天の御国、神の国に入る者たちの特徴を、そこで宣言しておられます。貧しい者、悲しむ者、柔和な者、義に飢え渴く者、憐れむ者、平和を造る者、そして義のために迫害される者です。そしてそのような者たちが、世に対してどのような力、影響力を持っているかについても語られました。すなわち、地の塩であり、世の光です。

そして 17 節から 20 節までで、イエス様は、天の御国における「義」について語られました。すでに八福においても、「義に飢え渴く者は幸いです。」と言われましたね。それから、「義のために迫害される者は幸いです。」とも言われました。6 章の終わりでは、「まず神の国と神の義を求めなさい。(6:33)」ともありますね。神の国に入るとのこと、義の中にいるということは密接につながっています。しかし、それは私たち自身の義ではないことを学びました。心が貧しいというのは、自分に何ら正しさが無いことを悟ることです。圧倒的に義がない、何も無い、空っぽだということから始まります。けれども、自分ではなく神の義を求めて、神に満たされたいという強い願いが起こります。そして、神を求める姿によって、迫害を受けたとしても、それでも由とします。これが、私たちキリスト者の世界であり、生き方であり、聖霊の力によって、私たちがこの中に生きるように召

されています。

### **1A 律法と預言者の成就 17-18**

けれども、イエス様がこのようにお語りになっていた当時、既に義の基準については、ユダヤ人の社会の中で根づいていました。最後の預言者であるマラキがいなくなってから、直接の神の声がなくなり、その沈黙の期間にいかにも主を恐れて生きて行くべきか、考えられてきました。それは、主から既に語られている書かれた律法を守ることによって、生きることができる考えたのです。そしてメシアが来られて、神の国をユダヤ人のために建ててくださると信じました。そのために、熱心に律法を守り行なおうと努力したのが、パリサイ派です。また律法に何か書かれているか熱心に調べていたのが、律法学者です。彼らは、イスラエルの子孫は神の国に入れるが、そこで大きな報いを受けるためには、律法を守り行なった者がそうなのだと教えました。天の御国で大いなる者になるのは、そのようにしなければいけないと教えていたのです。

しかし、その義の基準とイエス様が宣べ伝えられていた神の義とは大きな隔たりがありました。それで、イエス様が宣教の働きをしている中で、すでに確立している救いの方法と義の基準と、イエス様が語られている義が相対することが多々あったのです。そこで、イエス様は弟子たちと、また群衆にも聞こえるように、彼らが既に持っている義の基準と対比させながら、天の御国における義を語り始められます。

### **1B 律法の目標 17**

**17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。**

ユダヤ人の頭の中では、イエス様が律法学者やパリサイ派の教えている義と相対しているのであれば、それは律法や預言者、すなわち聖書そのものに相対していると感じました。全く新しいこと、私たちの心と思いを完全に一新させることをイエス様は語られ、またその力と権威を見せていました。悪霊を追い出し、病を治しながら、見せておられました。ですから、あたかも律法を破棄するかのように彼らには見えたのです。そこでイエス様は、「それは、正反対です」ということを言われています。イエス様は、ご自分が律法を破るために来たのではなく、むしろ成就するために来たのだと言われています。イエス様こそが、神の律法を行なわれているのです。そして、むしろ、彼らが教えている義が、神の義の基準に満たしていないと教えられるのです。

神の国の中に入るというのは、すなわちイエス様を主として生きて、その中に歩むということには、当時のユダヤ人社会のように、自分の持っている正しさとの葛藤が生じます。私たちはそれぞれ、一定の義の基準を持っています。昔からの言い伝えであるかもしれないし、習慣があり、人々の考え方があり、これが正しいと思っている基準があります。そして、その基準で物事を考えてい

るので、それとイエス様が語られていること、行なわれていることが衝突します。しかし、イエス様の語っておられる義こそが真実な正しさであり、真実な正義の実現です。むしろ破棄しなければならないのは、その自分が正しいと思っている基準のほうですね。

パウロは、律法を知らない異邦時であっても、心の良心の中に律法があることを話しました。「彼らは、律法の命じる行いが自分の心に記されていることを示しています。彼らの良心も証ししていて、彼らの心の思いは互いに責め合ったり、また弁明し合ったりさえするのです。(ローマ 2:15)」自分なりにこれが正しいという基準を持っているので、それで弁明もするし、また正しいと思う基準に満ちていない人を見ると責めます。しかし、イエス様の義が入って来た時に、それらの正しいと思っていた基準が瞬く間に溶け去って、そこにあるどろどろとした隠れた動機、闇の部分が見て来るのです。全く異なる次元、視点で見えてきてしまうのです。そこでパウロは、続けてこう言っています。「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠れた事柄をさばかれる日に行われるのです。(16 節)」

そして、律法学者やパリサイ派が、神の御言葉を使っていたことに注目してください。そしてユダヤ人は、彼らの律法の解釈をずっと聞き、受け入れていました。ですから、神の言葉を知らない異邦人に話しているのではなく、知っているユダヤ人たちに話しています。したがって、山上の垂訓、また福音書でイエス様がパリサイ派に対して語られている言葉は、聖書を神の言葉だと信じている私たちキリスト者に当てはまることが多いのです。御言葉に熱心に聞き、それを行おうと努力している人々がかえって、陥ってしまう過ちがあります。福音書は、まさにパリサイ人に対するイエス様の批判であり、非難、叱責だと言っても過言ではないぐらいですが、その姿を見る時に、私たちが「ああパリサイ人たちは、酷い人たちだね。」と他人事のようにしていたら、それこそがまさにパリサイ派的なのです。人は元来、パリサイ派なのだということ、そういう傾向を持っているのだということを知るべきだし、聖書を知っているからこそ、熱心だからこそ陥る過ちに気づく必要があります。

そして、ここで大事なことは、「成就するために来た」と言われていることです。成就する方はイエス様だということです。私たちではなくイエスご自身による実現、成就です。私たちは、ずっと旧約聖書を読んできました。そこで私たちは、旧約聖書がいかにも、イエス・キリストによって成就、実現されているかを見てきましたね。旧約聖書が古い書物で、新約聖書が与えられたのだから廃れたということでは決して無かったことを、私たちは知っています。イエス様が、ユダヤ人指導者らに語られました。「ヨハネ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証ししています。」そしてパウロは、コロサイ 2 章で、ユダヤ人の律法の中に出て来る、数々のいけにえの儀式、水洗いの儀式、祭りなどがあります。けれども、「来るべきものの影であって、本体はキリストにあります。(17 節)」と言いました。そのままキリストについて書かれている預言を実現されましたし、そういった影や型になっている部分も実現されました。言い方を変えると、律法や預言者の全てがキリストを示していて、イエス様ご自身が

預言者と律法の実体をもって来られたのです。

そして、この「成就」というのは、「完全に実行される」という意味合いもあります。イエス様において実現するだけでなく、イエス様ご自身が律法の要求を全うされたということです。主はこれから、律法、つまり神の教えを説き明かされます。そこに書かれていることを行なわれたのは、まさしくイエスご自身です。イエス様は言われました、「わたしは、その方(父)が喜ばれることをいつも行うからです。(ヨハネ 8:29)」そして、こうも言われました。「あなたがたのうちだれが、わたしに罪があると責めることができますか。(46 節)」イエス様が捕えられた時に、ユダヤ人たちは何とかして非を探そうとしましたが、見つかりませんでした。唯一、イエス様が死刑だと断じられたのは、ご自身をキリストとしたことです。

それだけではありません。律法には、それを守り行わない者は呪われることが書いてあります。また、死ななければならないとも書いてあります。ここが、律法の要求の中での骨頂です。罪を犯した者、神の命令に従わない者に対しては、その対価は死であると律法には書いてあります。ゆえに、アダムが罪を犯した時以来、神は彼らの罪を赦すために、いけにえによって赦そうとされました。動物が身代わりに死ぬことによって、その死の対価をもって赦そうとされたのです。イエス様は、ご自身がその肉体において、律法に違反した者たちに対する処罰を受けられたことによって、律法を確立したのです。

ですから、キリスト者というのは何なのか？「キリストの内にある者」と言い換えてよいでしょう。あるいは、「キリストが内におられる人」と言ってもいいです。私たちがキリストのように生きるのは、私たちの力や知恵でキリストに似た者になるために努力するのではなく、御霊によって内に生きておられるキリストに、生きていただくということです。この方に心の王座を明け渡し、自分の内で自分の周りでイエス様に働いていただくということです。ですからパウロが注意深く、律法の要求について話している箇所があります。「ローマ 8:3-4 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださしました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。」ここで、律法の要求が私たちによって満たされる、と書いていなくて、「私たちのうちに満たされる」と書いてあることが大事なのです。律法をその真髄までを全て行われた方、そして律法の要求である罪に対する処罰までも受けてくださいました。この方が私たちの内に生きておられるので、私たちの内に既に律法の要求が全うされているということです。

## 2B 一点一画変わらない律法 18

18まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。

これ以上、律法、神の掟を言い表している箇所はないでしょう。詩篇にも、同じような言葉があり、私たちは先ほど読みました。119 篇です、「89 主よ あなたのみことばは とこしえから天において定まっています。90 あなたの真実は代々に至ります。あなたが地に据えられたので地に堅く立っています。」どんなことが起こっても、どんな時代でも、どこにおいても、律法に書かれていることは全く変わらないのです。主が語られたことを、水増しすることも、差し引くことも一切できません。アメリカのニュース番組で、興味深い議論を見ました。二人の牧師がいるのですが、一人は同性愛者です。そこで、一人が聖書には、男が両親を離れて、女と結ばれ、二人は一体となるという言葉を持って来て、聖書には男女の結びつきである異性間の結婚しか書いていないと言いました。その同性愛者の牧師は、「時代が変わっているのだから、その解釈も進化するのだ。」と言いました。その牧師は反論しました、「神の御言葉は決して進化しない。」そして今、読んだ詩篇 119 篇 89 節を引用したのです、「主よ あなたのみことばは とこしえから天において定まっています。」そして、「人は変わるし、意見は変わるが、御言葉は決して変わらない。」としました。<sup>1</sup>

イエス様は、ですからパリサイ派の人たちとここにおいて変わらない立場だったのです。いいえ、もっと厳密であり、保守的でありました。実は、保守的だと言われている人たちが、自分の都合に合わせて中身を変えているということによくあります。これが、イエス様とパリサイ派の議論の中身になります。モーセの律法の座に着いているとされる彼らが、実はその解釈において自分のしていることを正当化するために、いろいろな小細工をして、後で付け足していったのです。

ところで、「**一点一画**」という言葉は、律法の言語、ヘブライ語に関わってきます。ヘブライ語の文字、アルファベットは、ほんの一点、また一画によって文字自体が変わってしまいます。「一点」というのは、文字の中で点だけで書かれる「ヨッド(Yod)」です。その点があるかないかで、単語の意味がすっかり変わってしまいます。それから、「画」は、曲がり角になっているところが出っ張っているかそうでないかで、文字そのものが変わります。例えば、D を表す「ダレット」と、R を表す「レーシュ」を比べると分かります。わずかにダレットが、右肩のところが出っ張っているのに対して、レーシュは出っ張っていません。つまり、すべての文字が改変できないのだということです。

ちょうど、このメッセージを準備している時に、すみません、時事問題になってしまいますが、今の公文書書き換え問題のニュースが出てきました。私は、その問題の何が問題なのか、よく分からなかったのですが、私の知人のクリスチャンがフェイスブックでとても分かり易い説明をしてくださいました。聖書から、人間にとって不都合な箇所を少し削除するとします。例えば、イエス・キリストの系図がありますが、そこになぜか、ユダとタマルの名が、そしてダビデとバテ・シェバの名が出ています。やばい、ユダが自分の嫁と不品行の罪を犯して、ダビデも他人の妻と姦淫して、その夫も殺してしまうというスキャンダルが書いてあります。では、そこを書かないで行こうとしたら、

<sup>1</sup> [https://youtu.be/ADdr\\_3DixC4](https://youtu.be/ADdr_3DixC4)

今度は、どうやってイエス様が、ユダへの約束であるそこから王が出て、メシアが出るというヤコブの預言を実現しないということになります。じゃあ、ヤコブの預言を書き直そう。そうやって辻褃を合わせようとするうちに、芋づる式にどんどん他の箇所も書き換えなければいけなくなり、聖書がすかすかになるでしょう、という話です。

けれども、しばしば起こるんですね、キリスト者と言われている人々の間でも。ここの箇所は不都合だから、ここは強調してはいけなくとします。先ほどの同性愛の罪もそうでしょう。そして、死後に神から裁きを受けるということもそうでしょう。私は、黙示録の火による裁きを、そのまま信じるのは神の愛にそぐわないという、神学校の先生の記事を読んだことがあります。この過ちを犯したのが、エホバの証人の創設者、チャールズ・ラッセルです。彼は地獄の教理に疑問を抱き、それで、「地獄というのは墓にしか過ぎない」として、地獄の存在を否定しました。けれども、それを否定すると、では十字架になぜキリストがかからなければいけないのか？ということになり、十字架否定へとつながっていきました。それで、行ないによる救いとなり、そしてエホバの証人という組織にどれだけ従順かによって、救いが決まるというようになっていったのです。このように、一つを取っていくと、他のものも数珠つなぎで取り替えて行かねばならないのです。そして主ご自身を否定するようになっていくのです。ですから、イエス様は、一点一画も、天地が過ぎ去るまで消え去ることはないと言われました。

## 2A 天の御国の義 19-20

### 1B 律法の遵守 19

19 ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを行い、また行うように教える者は天の御国で偉大な者と呼ばれます。

神の恵みがあるのだから、神の命令はないがしろにしていいのだという考えに対して、イエス様は完全に否定しておられます。すべての戒めであることを強調するために、「最も小さいもの」とまで言われています。私たちは常に、小さいもの、些細なものをないがしろにする傾向がありますね。ずっと後にイエス様は、人々がさげすむような人々に助けの手を差し伸べ、世話をした人々について、「最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。(25:40)」と言われました。神の教えについても、私たちが取るに足りないものだと思われるものでも、心を込めてそれを調べ、その教えの中に生きようとする時に、主は豊かな恵みを与えてくださるということです。

しかし、次の 20 節に出てきますが、キリスト者が律法を守るという時は、パリサイ人や律法学者の人たちが守るといふのと違います。私たちの内には、律法を守る力がありません。けれども、福音は、神が私たちに御霊を下され、心を一新してくださったということです。そして、その新しい神との関係、愛による関係で、恵みによる関係で、主が命じられることに従うことができるようになる

ということです。御霊が与えられることについて、エゼキエルが預言しましたが、その目的は主の戒めを守ることでした。「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにされる。(36:26-27)」そして、御霊という言葉は出てきませんが、預言者エレミヤは、「心に律法が置かれる」ことを言われました。「わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。(31:33)」

そして、有名なパウロの語った、恵みによる救いの箇所も見てみたいと思います。「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。(エペソ 2:8-10)」救われたのは、自分のしたいことをすることができるようにではなく、良い行いができるように救われたのです。自分というものを、罪に縛られ何もできなくなっていたものが、自由にされ、良いことが行なえるようになったのですから、神の命令を守り行わないとしたら、本末転倒なのです。

## 2B パリサイ人と律法学者の義 20

そして、イエス様のいわば、過激な言葉が出てきます。**20 わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。**

先ほども話しましたように、律法学者やパリサイ人こそが、律法を守ることに義を体現していたというのが、ユダヤ人たちの認識でした。その徹底ぶりは、凄まじいです。例えば、十分の一の捧げ物とかは、自分の台所にある香辛料も、そこから十分の一を捧げようとしていました(マタイ 23:23)。それにまさる義ですから、一体何のことなのでしょう？

私がクリスチャンになって間もない時、幸いにも大学にクリスチャンの先輩に会いました。その一人がどのようにしてクリスチャンになったのか、その救いの証しをするのを聞きました。彼は中学生でしょうか、人生の意味を探して、孔子の論語の挑戦してみたそうです。そこに書かれていることを、一週間、あるいは一定期間、やってみようと定めてやってみたそうです。できたのだそうです、ところが、トンデモナイことに気づきました。全く、論語に書かれていることをぶち壊すようなことをしていました。そう、高ぶりです。自分がここに書かれていることをできているではないか、というぬぼれ、高ぶりに心が満ちていたそうです。

パリサイ派の人たち、律法学者の人たちは、とても真面目でした。熱心でした。真面目で熱心であることは人間的には素晴らしいことです。けれども、そこにある義は二つの点で大きな間違いが

ありました。一つは、自分自身の義だということです。人間の心のうちにある罪の問題に取り組んでいないということです。正しくなろうとして、心の中は高ぶりに満ちているという問題です。もう一つは、人に見せる義だということです。人には、彼が正しいことを行なっているとよく分かる義でありましょう。外側で見える正しさを認めていました。ですからイエス様が、「**律法学者やパリサイ人の義にまさって**」いる義と言われる時に、自分を正しくするという義でもない、人に見える義でもない、それにまさる義を持たなければいけない、そうでなければ天の御国、神の支配される国に入ることはできないと言われました。

それは私たちに、とても身近な義ではないでしょうか？自分ができているか、そうでないかでそれで自分の正しさを測ろうとする義です。ここに欠けているのは、神を相手にしていないことです。神の国であるのに、神のことを考えるのではなく、自分がいかに達成できたかを考えているのです。ルカ 18 章にある、パリサイ人と取税人の祈りの違いによく表れています。パリサイ人は、「神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。(11 節)」全然、神に向かっていません、自分に向っています。神に祈っているのに、神に対して極めて不誠実です。けれども、私たち人間は絶えず、他の人たちと比べて、自分の義を測ろうとしています。神を相手にしなければいけません。神の聖さ、正しさに自分を比べないといけません。人に見せる義もそうです。神に見せる義ではなく、人にどう見られるかということを考えています。これも、私たちの文化になっていませんか？

私たちは午後に、パリサイ派の義と神の国の義の違いを、いろいろな例によってイエス様が説かれるところを読みます。